

(別紙1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 〈祭典〉のユートピアから〈啓蒙の灯台〉エコール・サントラルへ

氏 名 小 林 亜 子

本論文は、フランス革命の一〇年間に、新しい社会とそれに相応しい人間を形成していくという課題が、どのような意味と重要性を付与され、議論され、計画され、そして実行されたのか、またその新しい試みが当時の人々によってどのように受容されたのかを、革命前の社会における人間形成の営みも視野にいれつつ、一次史料から実証的に明らかにしようとするものである。

〈公教育〉が一つの社会制度として生まれようとしていたこの時代においては、教育について語った人々がイメージし目指していたものは、実は必ずしも今日のように〈学校〉へと集約されるものではなかった。現代の社会では、教育を表象しているのは〈学校〉であるが、二〇〇年前に揺籃期の〈公教育〉が対象としていたのは、未だ「学校化」されざる社会であり、そこにおいては〈公教育〉として〈学校〉に劣らず重要視されていた制度が幾つも存在した。例えば、革命期に行われた夥しい数の〈祭典〉をはじめとして、当時、〈公教育〉として広く施行・受容されていたのは、〈学校〉以外の諸制度であった。とりわけ〈祭典〉は、〈公教育〉として成功を収めたと認識されていたにも関わらず、一九世紀以降の「公教育」の枠組みからは抜け落ちてしまい、現在では〈祭典〉に〈公教育〉の片鱗を見出すことさえ困難になっている。

革命期の〈公教育〉に関する史料について調べていくと、〈祭典〉の問題は、ほとんど必ず含まれているか或いは言及されているのだが、フランス革命期の〈公教育〉について〈祭典〉を分析の中心に据えた研究は殆どみられなかった。その背景には史料上の問題と分析視角の問題が存在した。

史料についてみれば、フランス革命期の教育史研究は、革命期を代表する思想家の教育案や「公教育委員会」での論議ないし法案を中心に進められてきた。これらの諸研究の用いた主たる史料は、19世紀末に刊行されたM・J・ギョーム編の史料集で、「公教育委員会」が設けられていた「立法議会」(1791～1792年)及び「国民公会」(1792～1795年)について、「公教育委員会」の議事録、議会での報告及び関係する史料を編纂したものであった。従って革命期全体の時期を対象とする史料集ではないため、「憲法制定国民議会」(1789～1791年)や「総裁政府」(1795～1799年)期の論議や議会外の動き、とりわけ革命初期、1789年に成立した「憲法制定国民議会」で重要な論題としてその作業がほぼ全て「憲法委員会」に委任されていた〈祭典〉計画や、この議会での論議、また革命後初の体系的総合的「公教育組織法」(1795年)が施行された、いわば革命の後半期にあたる「総裁政府」期

の〈公教育〉を巡る動きも、これらの史料集によっては知ることができなかった。

研究視角上の問題点というのは、革命期に限らず、教育史全般について、その主要な対象が〈学校〉を中心とする教育制度であるか、或いは教育について思想家たちが残した言葉であったことにある。教育に関する事実とは主として法令の条文をもとに研究され、教育の思想とはこうした事実とは異次元の、偉大な思想家の頭脳に宿った普遍的な理念として探求される傾向にあった。また革命期の教育史研究においては、概して第三共和政下に確立する「近代公教育の三原則（無償性、義務性、世俗性）」を革命期の教育案に探し求めるという観点から、個々の教育案を歴史的文脈とは切り離して検討したもの、ないしは革命期の政治史的時期区分・党派区分に応じて色分けした上で、それぞれの時期・党派を代表するモデル案としてコンドルセ案、ルペルティエ案等々を考察したものが主流であった。

結果的に、立法議会期と国民公会期について、刊行史料が対象としている「公教育委員会」の動向や議会で提案された公教育案を思想面から研究することに重点がおかれ、また〈学校〉以外の様々な公教育の試み、地方の動向や、実際にどのような教育が行われたのかについては殆ど分析がなされないままであった。革命期に〈公教育〉として施行・創設された図書館、植物園、博物館、美術館等々とともに、〈祭典〉もフランス革命期教育史の研究対象とはならなかったのである。

こうした問題点を克服すべく、革命期の公教育に関するギョーム編史料集以外の一次史料を渉猟することを重視し、フランス国立公文書館所蔵の未刊行手稿史料の調査・収集を進めた。公教育関係（AN/F/17）の文書は、革命前後の時期のものだけで数百あり、とりわけ革命後半期については未整理の状態で詳しい目録が存在しないため、気の遠くなる作業に思われたが、当時の人々が公教育をどのように実現しようとし、それらがどのように受け止められたのかを知るためには、これらの史料と取り組む必要があると判断し、留学中からのベ二〇年以上かけて調査・分析を重ねた。

この調査の過程で、総裁政府下の「地方」や「併合地」における公教育の状況を物語る史料もかなりの程度存在することがわかったので、地方や併合地の状況も明らかにしていくため、当時の併合地にあたる地域も含めた、革命期の教育を扱っている地方史や施設のモノグラフについても可能な限り全て検討することとした。

これらの史料に基づいて、革命期の公教育史を以下の点から再構成することを試みた。

- ①革命期の公教育について、革命初期から総裁政府期まで革命の一〇年全体を扱うことで、事件史や政治史の次元と連動しつつも、別個の連続面（政治的断絶とは異なる連続面）をもっていた革命期の教育史の全体像を明らかにする。
- ②公教育案や議会での議論などの理念・思想面だけではなく、採択された法制に基づいて公教育が当時の社会においてどのように施行され、人々に受容され経験されたかを分析し、フランス革命の社会文化史に新たな光をあてる。
- ③中央（議会、公教育委員会、内務省）の方針と、地方、県、学校、施設等が実施したこととの差異に注目しつつ公教育の施行状況を解明し、地域による特色、地域ごとの教育をめ

ぐる人々の態度・ネットワークの差異・等々を検討する。

④革命戦争の開始に伴う国際情勢をふまえつつ「併合地」での公教育施行状況も検討する。

⑤長期の時間枠の中に革命期の公教育を位置づけることによって、革命前のフランス社会における教育（人間形成の営み）と教育をめぐる人々のあり方との連続面や断絶面、また一九世紀以降の教育との関係を明らかにする。

以上の分析を進める中で、革命初期に施行された最初の憲法（「1791年憲法」）及び、革命後半期に施行された革命後初の体系的総合的な「公教育組織法」（1795年）のいずれにおいても、〈祭典〉が〈公教育〉として重視されていたことが明らかとなったことから、本論文の構成は、以下の通りとした。

第1部では、革命前のフランス社会における〈子ども期〉〈若者期〉といった年齢期概念がどのように現代と異なっていたのかを辿り、当時の人間形成の営みを広く検証し、革命期に施行される「公教育組織法」における〈子ども期〉〈若者期〉など年齢概念の位置づけや、「革命祭典」において〈若者〉が果たすことになる役割が、革命前と比べていかなる変化をみせたのかを分析した。

第2部では、革命の開始とともに議論されていた〈公教育〉の問題について、〈公教育〉としての〈祭典〉が「1791年憲法」にも大きく位置づけられる転換点となった「連盟祭」や、この〈祭典〉が契機となって行われた様々な教育との関係に焦点をあてて、当時の〈公教育〉の諸相を明らかにし、合わせて〈公教育〉と〈公共性〉の問題を検討した。

第3部では、革命後初の体系的公教育法として施行された1795年の「公教育組織法」について、法令の思想面の検討と併せて、この組織法に基づいて実際に行われた〈祭典〉をはじめとする公教育の内容、組織法に基づいて県単位で設けられた様々な施設、組織法による教育に携わった人々、教育を受けた人々について、パリだけではなく「地方」や「併合地」、フランス国外にも目を向けて分析し、「公教育組織法」において重点がおかれたとされるエコール・サントラルは、いわば〈啓蒙の灯台〉であったことを明らかにした。またエコール・サントラルに関わった人々、とくに教授たち・学生たちの出身地域や経歴・出身社会階層の分析などから、この教育が教授たち・学生たち・その親たちによる新しい教育への理解によって支えられていたこと、アンシャン・レジーム、「啓蒙の世紀」にうまれていた国際的な文化的、商業的、宗教的ネットワークによっても支えられていたこと、宗教色を廃した啓蒙思想の特徴を示す新しい公教育に対して当時の人々がどのような態度・関心を示したのかといったことについても成果を導いた。

以上により革命期の公教育史全体についてのこれまでの評価、すなわち、「理論」面において「近代公教育」の理念を構築したという評価と、「施行された内実」という面において何も残さず教育の断絶・混乱を生んだという評価を、実証的に捉え直し、さらに革命期の公教育の実験・経験を、広い地理的枠組みと長期の時間枠の中に位置づけた。

当時の人々が教育をめぐって思い描いていたものは、議会の議事録や法案として現れた教育思想からだけでは読み取ることはできないものであり、現実の教育の営みを視野に入

れて初めて浮かび上がってくるものであった。このとき公教育（エコール・サントラルの施設）として創設された多くの図書館、植物園、博物館、美術館の多くは、現在まで存続しており、地域や県や都市の集合的な憩いの場、社会教育の場ともなっていた。

フランス革命期につくられた〈啓蒙の灯台〉エコール・サントラルの実験は、〈公教育〉の経験として、フランス革命の遺産を人々に思い起こさせる場となっていたのである。